

# アダム・ガーフィングル氏（『アメリカン・インタレスト』 編集長）講演会

“What Would Charles Evans Hughes Think ? — or the ‘Pivot’ to Oblivion”  
開催報告

井原伸浩

2015年11月2日、名古屋大学大学院国際言語文化研究科附属グローバルメディア研究センターは、米学術誌『アメリカン・インタレスト（*The American Interest*）』編集長のアダム・ガーフィングル（Adam Garfinkle）氏をお招きして講演会を開催した。講演の中でガーフィングル氏は、今日のアメリカ合衆国による外交・安全保障政策にグランドストラテジーが欠如している現状について、アメリカの歴史を第二次世界大戦以前まで振り返りつつ分析された。国務長官のスピーチライターであったご自身の経験や、その幅広い人脈から得られた示唆に富むお話を織り交ぜていただき、たいへん興味深い議論を提供してくださった。以下、概要を報告する。

アメリカのグランドストラテジーは、北米大陸の支配に始まり、先端技術を用いた植民地拡大へと移り、第二次世界大戦期には、反覇権とその形を変えた。反覇権戦略は、ドイツや日本に向けられていたが、1945年には、覇権国ソ連や、潜在的覇権国の中国がそうした戦略の対象となっていく。冷戦期にはさらに、前方展開（forward deployment）戦略が採用されたが、その要所は中東にあった——エネルギーの観点だけでなく、ヨーロッパやアジアとも地理的につながっていることが重視されたのである。

こうした戦略は、アメリカの有する同盟システムによって機能した。北太平洋条約機構（NATO）のような多国間や、ハブアンドスポークのような二国間の同盟を基礎としていたのである。こうした同盟の要諦は、ソ連や中国を封じ込めるだけでなく、同盟国間に亀裂を生まない安全保障の競合抑制（security competition suppression business）であった。冷戦中には、例えばギリシャとトルコや、日韓の対立が抑制されたのである。こうした戦略により、アメリカはグローバルな安全保障の公共財を提供しようとした。

周知のように、ソ連に対する反覇権戦略は、1989年、成功に終わった。当時のアメリカは、中国を覇権的な脅威とみなしていなかったこともあり、冷戦終焉後は、勢力均衡に基づく古い形の地政学は終焉し、国際機関の設立により、統合が進むという楽観的な見方が広がった

911後、反テロは新しいグランドストラテジーになった。とはいえ、アメリカは単独での行動が、あまりにコスト高であるため、同盟システムを用いてことに当たろうとした。アメリカにとっての悪夢は、大量の死傷者を出すテロリズムおよび武器の拡

散であった。しかし、ガーフィングル氏によると、911 スケールの大量の死傷者を出す攻撃は、何度も繰り返されるような一貫した脅威でなかったし、大量破壊兵器の拡散は実現しそうにない。そうなると、反テロは、反覇権というグランドストラテジーを塗り替えるものではなくなった。その結果、グランドストラテジーの空白が生まれている。

オバマ政権の戦略がいかなるものか、解き明かそうという試みはある。しかし、その答えは簡単でない。政権はその明文化を図っているものの、そこでは優先順位が明示されておらず、戦略とは言える代物ではないからである。したがって、オバマ政権の行動から戦略を推し量る必要が出てくるが、これには様々な解釈が存在する。

すなわち一方で、反オバマ的な見方がある。オバマは左派であり、グローバルな安全保障財を提供することも、同盟システムも、時代遅れのものとして信奉していない、というものである。他方で、オバマを支持する見方があり、アメリカはあまりにも、他国の問題に手を伸ばしすぎているという議論である。同盟国は独自に国の安全を守ろうとして、新しい勢力均衡が生じているのだから、アメリカは、それほど他国の問題に首を突っ込まなくていいと、こうした論者は考える。

これに対し、ガーフィングル氏は、後者は誇張が過ぎると批判した。たしかにアメリカは、ゼロベースで国益を再評価してこなかった、であるとか、アメリカは中東に多大すぎる投資をしてきたとする後者の見方は正しいと、ガーフィングル氏も考える。しかし、ロシア、イラン、中国という修正主義国家の動きにかんがみれば、19世紀の勢力均衡が過去なものとなっているという見方に、ガーフィングル氏は賛同しない。こうした国々へのアメリカの態度から、オバマ政権が、システマティックに戦略を考えているように思えないとガーフィングル氏は批判する。アメリカの評判に疑問が呈され、それによっていくつかの同盟国が自助を迫られることは、パキスタンが核武装したように、危険な結果を招くとも付け加えた。

2016年に大統領選挙があるが、新しい大統領のもと、アメリカがどのようなグランドストラテジーを形成するかは不透明である。大統領がヒラリーになるにせよ、共和党候補になるにせよ、これまでそうした観点で議論がなされていないためである。

紙幅の都合でここでは紹介できないが、講演で紹介されなかった戦略や、ガーフィングル氏による国務省でのスピーチライターとして勤務に関する質問など、質疑応答では活発な議論が展開された。講演会には、大学院生や教員など多くの参加者が集まり、大変な盛況であった。ガーフィングル氏をはじめ、開催に当たってご尽力いただいた方々に、心よりお礼申し上げます。